
男、化け猫、春遠からじ

南蛮漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男、化け猫、春遠からじ

【Nコード】

N2515BA

【作者名】

南蛮漬け

【あらすじ】

目が覚めると隣に一五、六の裸の乙女がいた。美少女である。

そして何より、布団の一部が赤く染まっている。

二日酔いで、記憶は定かではないが、これはそういつことなのだろうか。

断じてこれは、同意の上であるのだと信じたい。責任者は何処か。

私は混乱の頂点にいる。

断じて犯罪ではない、と信じたい。

一

二日酔いである。頭が重い。

隣に一五、六の少女がいる。毛布の隙間から垣間見える胸は小さいがぶつくりと膨らんでおり、白磁のような肌に生唾を飲み込む自分がいる。思わず、布団から飛び出すと、シーツの一部が赤く染まっていた。

私は思わずキヤーと叫んだ。

二

にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃあ　朝から、一階に住む大家の

猫が煩い。

どうやら、大家のばあさんは不在である。猫が鳴くのは餌を求めと相場がきまっている。

私は、国際化から生じた食文化の変化についてと題したレポートに勤しむ筆を止めた。大仰なタイトルであるが単位のためだ。ワープロが死語になり、パソコンがお買い得になって出回って久しい昨今において態々手書きのレポートである。教授の厳命である。教授曰く、お前らのレポートなぞネットからの引用、小一時間で終わる。せめて手を動かせとかなんだか。嫌がらせであろう。自分の時代に存在しなかったネットというものをねたんでいるのだ。なお、教授は昭和から時が止まったアナログ人間であることを蛇足しておく。

閑話休題。

私はおもむろに、冷蔵庫を開ける。チルド室の隅に魚肉ソーセージが鎮座している。先の忘年会のあまりである。なお、現在は2月。賞味期限は切れて久しいが、猫には問題ないであろう。そう考えて、

魚肉ソーセージを手にとると、猫を黙らせるために階下に向かった。

さて諸君、挨拶が遅れた。はじめまして。私は、凡百ある大学の一つに通う学生である。学生さんと聞くと、白線の入った学帽にマントをはおり、町娘から深窓のご令嬢までをきやあきやあと色めかせたとも聞くが、それも古典小説に語られる昔の話。時は平成。バブル経済も弾けて久しく、未曾有の経済難の時代である。社会の風が厳しく寒い。そして、2月の寒風が吹き荒む外はもっと寒い。私は、早くも猫なんぞを黙らせるためにとつた行動を悔やんだ。その間、2秒。

油をさしても軋む戸を開けて、魚肉ソーセージを手には、プレハブによくある安定の悪い鉄の階段を下りる。

階段をギシギシと降りる音が響く。

にゃあ、にゃあと鳴く声が近づいてきた。

猫が、向かってくる。猛然と。

にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃあ、にゃあ、激しく鳴くと、猫は私の周りをぐるりと回る。私が、魚肉ソーセージを手渡そうとすると、猫は勇んで飛び上がり、私の手から奪い取った。

むしゃむしゃと、食べる。

奪う勢いの割には、食べるのが遅い。猫のくせによく噛んで飲み込んでいる。さらには、うみゃう、うみゃうと、声まで聞こえてくる。食べながら鳴いているらしい。

私は、なんとも言えない気持ちになりつつも、これで任は終えたとばかりに、部屋に戻る道を引き返した。

部屋に戻るころには、猫の声は聞こえなくなっていた。

夕方である。サークルの追出しコンパのために、財布をもつて予約した居酒屋に向かう。サークルといっても、零細である。その上、男ばかりで花がない。追い出される先輩は1名。追い出す先輩は私を含めて2名である。これが、逆なら財布に厳しいが、2人で1人分をおごるとなれば、まだ気が楽だ。

「後輩よ、私は社会人になる。社会の荒波にもまれに行くのだ！ 給金取りとして、若い女子にきゃあきゃあ言われる身分になれに違いない！」

最近は、年上の男がモテると聞くぞ」

先輩は声高に叫ぶ。呑み屋の親父が迷惑そうに睨む。先輩は20台半ばにして、40代のオーラを醸し出す老け顔の男だ。青髭が濃く痩せている。

「先輩、頑張ってください。ただ、モテるのはナイスミドルな紳士です。裸にネクタイの紳士ではなく、スーツにネクタイをつけこなす生粋の紳士がです。先輩では無理でしょう」

安田は辛辣である。安田は白髪交じりの小太りの男だ。いわゆるヲタクだ。

「そうですね、先輩。先輩は老け顔だから、ミドルにはなれますがにじみ出るオーラからダメ臭が漂ってきますから無理ですね。現実を見据えてお給金でソープにでも行ってください」

私も人のことは言えない。

「君たちは、先輩というものを敬えないのかね、私あつてのこのサークルというのに！」

「先輩が無理やり、誘ったうえに、碌々活動していないじゃないですか。実際、我々のサークルは怪しいのです。なんですか、妖怪倶楽部って」

安田の発言は正論である。

「妖怪のロマンが分からないのかね、君たちは」

先輩は妖怪にロマンを追い求めている。

「ロマンは分かりますが、実際は？みサーですよね？」

安田も、ロマンは分かるらしい。

「酒にこそロマンがある。小さいおっさんも酔いどれてこそ出会えるのだ！」

先輩のロマンはコロコロと変わる。

「おっさんなぞ見て何が楽しい！****こそが正義だ」

私は、我慢できずに今を時めく女優の名を言う。

おっさんのどこにロマンがあるのか、まったくもって理解できない。若くて美しい女性にこそロマンがある。おっとり系お姉さんタイプの女優****は全男子の夢を現実化した存在と言えた。

国民的なアイドルとして成功したことも必然だったといえよう。

「現実をみる。****なんて非現実だよ。あれは演技でしかない。この前の週刊誌をみただろう。」

この画面の向こうにこそ、俺たちを真に受け入れてくれる人がいるんだ、見ろ、この娘を。俺のことだけをじっと見つめてくるんだぜ」

安田は、携帯ゲーム機を取り出すと、俺の彼女と言って画面を指さしている。心底、気持ち悪い。そして、週刊誌のゴシップはガセであると信じている。黙れ安田。

そこに先輩が反応して、私がそれをバカにする。安田が反論し、私が油を差せば、まあまあと先輩がなだめにはいる。その先輩を安田が扱き下ろし、事態に収拾がつかなくなる。

店の親父の迷惑そうな視線も顧みず、我々は大いに？んだ。

喧嘩のように見えて、その実、このくだらない応酬がたまたまなく楽しかったのだ。先輩は就職して地元に戻るといふ。私にも、安田にも少なからず寂しさがにじんでいたのかもしれない。

大いに、飲み明かし、下宿に戻った。一も二もなく万年床に倒れ伏

す。ずきずきと頭が痛む。痛む頭と薄れる意識の傍らで、万年床に
白いふわふわとした珍客がいたように見えたが、眠気に負けて倒れ
伏した。ぬいぐるみなんて、もっていたかと思いつつ。

フニャアアという声と、何かに鋭く引つかかれたような気がしたが、
定かではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2515ba/>

男、化け猫、春遠からじ

2012年1月6日13時47分発行